

● 体験学習プログラム ～国際社会や地域の課題に目を向け、視野を広げる～

ボランティア・NPO活動センターは、治安や衛生環境が安全と判断される海外において、学生がその地域の抱える問題に触れるとともに、地域貢献、福祉、環境関連の現地NPO・NGOとの交流を通して、ボランティアなどの体験学習を行いながら異文化間における相互理解と共生を学ぶ『海外体験学習プログラム』を実施してきました。内容としては、本学の専任教員がコーディネーターとなって企画・引率するプログラムを公募し実施する学内企画と、NPO・NGO団体が実施するスタディーツアーの中から、学生にとって学びの多いプログラムを採択する学外企画の2種類を提供しています。

また、今年度は日本国内でのボランティア体験を通じて地域のさまざまな課題にも目を向け、視野を広げる『国内ボランティア体験プログラム』を初の試みとして1コース実施しました。結果、夏春合わせて以下の6コースを実施するに至りました。

更に、夏期・春期のプログラム終了後には参加学生によるふりかえりを兼ねた合同報告会をそれぞれ実施し、その終了までを一連のプログラムとすることで、経験を共有するとともに学びを深める機会となっています。

今後も国際社会や日本国内における学生の関心事と学びの深さを踏まえ、危機管理面においてはテロや感染症などの危険が少ない地域で、なおかつ費用面でも参加しやすい企画を可能な限り提供し、本学学生の学びの場を広げていきたいと考えています。

	プログラム企画者・団体	行先	実施期間
国内 学内	法学部 講師 谷垣 岳人 (当センター副センター長)	滋賀県	2010年8月24日(火)～8月28日(土) 4泊5日
	経済学部 教授 大林 稔	タンザニア連合共和国	2010年9月1日(水)～9月15日(水) 15日間
海外 学外	経済学部 教授 松島 泰勝 (当センター委員)	アメリカ合衆国(グアム島)、パラオ共和国	2011年2月14日(月)～2月22日(火) 9日間
	特定非営利活動法人 JIPPO	スリランカ民主社会主義共和国	2010年8月19日(木)～8月26日(木) 8日間
	財団法人 PHD協会	ネパール連邦民主共和国	2010年8月18日(水)～8月27日(金) 10日間
		インドネシア共和国	2011年3月19日(土)～3月27日(日) 9日間



○国内ボランティア体験プログラム／滋賀県（大津市・栗東市）

■参加学生	
小島 誠（理工学部 環境ソリューション工学科3年次生）	平形 駿（経済学部 現代経済学科3年次生）
竹本 真梨（法学部 政治学科3年次生）	横関つかさ（法学部 政治学科3年次生）
三原 正志（経済学部 現代経済学科3年次生）	金山 和輝（法学部 政治学科2年次生）
白石 早希（経営学部 経営学科3年次生）	
■引率教員、テーマ	
谷垣 岳人（法学部 講師）「森にふれあい森に学ぶ」～森林での間伐体験を通して森林の持つ意味を学ぶ～	

■行程			
日程	場所	時間	活動内容
8月24日 （火）	滋賀県栗東市	10:00～11:00 13:00～14:30 15:00～16:00 19:00～21:00	○オリエンテーション 企画プログラムの説明／担当者及び参加者紹介 ○講義「森林と林業について」 金勝生産森林組合 宮城さん ○講義 森林の知識／間伐作業に伴う安全基礎知識／森づくり補助制度 ○講義・ワークショップ 林業・木材に関する新聞報道／自己紹介ワークショップ／ 生命のつながりカードワークショップ
8月25日 （水）	滋賀県栗東市	9:00～11:00 13:00～16:00 17:00～18:00 19:00～21:00	○実習 樹木観察／間伐体験（下草刈り作業） ○実習 間伐体験（下草刈り、間伐、枝打ち、皮むき） ○ビデオ学習（～森と共に） ○ワークショップ・ナイトツアー 生命のつながりカードワークショップ 続き／ 夜の森 ナイトツアー
8月26日 （木）	滋賀県栗東市	9:00～11:00 13:00～16:00 19:00～21:00	○実習 間伐体験 ○実習 間伐した木材の整理、運搬作業 ○講義「里地・里山について」
8月27日 （金）	滋賀県大津市	10:00～11:30 13:00～16:00	○木材加工と木材乾燥施設の見学 株式会社 伊藤源（大津市衣川） ○滋賀県産材のモデルハウス見学見学（大津市） 一般社団法人 安曇川流域・森と家づくりの会 ○ビデオ学習 NHK特集～里山／ボズーからの手紙（滋賀県環境学習ビデオ）
8月28日 （土）	滋賀県栗東市	9:30～12:00	○里山「こんこん山」の見学／澤さんの小屋にてお話



小島 誠

(理工学部 環境ソリューション工学科 3年次生)

今回、林業に携わっておられる人に林業の現状や森林に関する知識、間伐作業するにあたっての安全管理や滋賀県（行政）が行っている森づくり補助制度についての講義を行ってもらい、今まで知らなかったこともたくさん知れた。

2日目と3日目は、その間伐体験を栗東市で林業に携わっておられる方に教わりながら行った。間伐作業するに当たって、ヘルメットや服装や周りのメンバーとの間隔等の安全確認をしっかりとすることが重要であることを講義で教わった。間伐の一連の流れは①間伐樹木の選定②伐採対象樹木の周辺の整備③伐倒方向の選定④ロープを張る⑤受け口・追い口を作る⑥張ったロープで引っ張る⑦枝打ち⑧玉切り⑨搬出という手順で行われる。簡単に思えるが実際に作業を行ってみると、一本伐るだけでもすごく大変でいろんなことで失敗し、搬出も険しい道の中、重たい木を運ばないといけないということや、間伐作業は林業のプロでも危険な仕事だと聞き、林業の大変さを身を持って体験した。

私は滋賀県民として一人でも多くの人に今回学んだことを伝え、滋賀では森づくりに関してのイベントがあることを広めていきたいと思う。滋賀県が行っている森づくりのイベントにも積極的に参加し、今回学んだことを思う存分に生かしていきたい。



竹本 真梨

(法学部 政治学科3年次生)

今まで日本の木材を使った製品を自分達が使っている事は分かっていたが、日本の森林や林業という仕事は専門家に任せていればいい、自分自身には林業は関わりのないものと捉えていた。また、環境や自然の問題は情報が錯綜しており、何が正しい情報なのか普段から疑問に

感じていた。

今回の体験で実際に森林に行き、間伐体験や林業家の方のお話を直接自分の目や耳で体感したことは、全てが新鮮であり、体験当初抱えていた森林や林業に対する疑問が解消された。

また、学んできた日本の森林や林業のことを一人でも多くの学生に知ってもらえるよう、今回の体験の報告会で、できれば多くの人に参加してもらい、私たちが学んだことをしっかり報告し、報告会に参加した人に少しでも日本の森林や林業のことについて興味・関心を持ってもらったり、何か発見してもらえればと考えている。

4泊5日という短い間であったが、今回の体験で日本の森林・林業の様々な問題点や課題を知ったとともに、森林に対する今までの自分の行動や考えを見直す良いきっかけになった。これからは今回の体験で日本の森林・林業の現状を知ってしまった以上、もうこれらの課題は私にとって他人事としては捉えられない。今後も、日本の森林や林業に対して関心を持ち、またそれに関わる体験をしつつ、知識や経験も深めていきたいとも考えている。

三原 正志

(経済学部 現代経済学科3年次生)

今回のプログラムでは間伐ボランティアを中心として、林業について多くのことを学びました。

間伐とは里山や人工林の木が育ちやすいように、木を切る作業のことです。矛盾しているようにも感じますが、間伐をしなければ木は密集してしまい、太陽の陽の光を十分に受けることができず、根が十分に育たず、結果として土砂災害などを引き起こす危険性が高くなります。間伐は環境破壊とは完全に別物であり、むしろ



自然保護に大きな役割をはたしていると言えます。もし、滋賀県の山々が間伐されずに放置されてしまえば、琵琶湖に集まる水は、汚くなってしまいうだろうし、そうなると滋賀県だけの問題ではなくなってしまいます。

間伐の取り組みがなかなか進んでいないのは、山の手入れの仕方を知らない人が多く、また、林業をしようにも、なかなか林業だけで生活するというのは難しいというのが現状だそうです。これからの課題は、どれほど多くの人がこの問題に興味を持ち、林業に携わる人が増えるかが重要だと思います。

今回、間伐を体験して思ったのは、ひとつひとつの作業は大変ですが、一本の木を切り倒しただけでも一見してわかるだけの違いがでて、とてもやりがいを感じました。今後もこのようなプログラムには積極的に参加したいと思います。



白石 早希

(経営学部 経営学科3年次生)

1日目の森林と林業についての講義では、金勝周辺の林業の奈良時代から続いている歴史、現在に至るまでの衰勢、今後の課題について学んだ。また、森林の知識や、翌日の間伐作業に伴った知識や注意事項、森づくり補助制度についても学んだ。森づくり補助制度では、森林と林業についての講義とは違った角度から林業をとらえた現状が聴け、衝撃を受けた。利益を得ている他国と補助金なしには成り立たない日本の林業との違いは、伐採から販売にかけてかかるコストであった。また、林業は長い年月をかけ行うものなので流行により方向転換することに対応できない。講義を通し林業の難しさを実感した。

2日目、3日目には間伐体験を行った。森林の中には枯れてしまっている木もあり、込み

合った木々が互いに成長を阻害してしまった結果のように思った。木々の健全な成長のためにも間伐の重要性を感じた。また、前日学んだ間伐作業の基礎知識である林床に日光を届く



ようにすることが、草木の成長を促進し、土砂災害防止、水資源の保全へと繋がる流れが、実際、間伐を体験してみることによって現実的に感じられた。

今回のプログラムは、自分の専攻している以外の興味ある分野について学べる貴重な機会だった。この体験で自分の視野が大変広がったと感じている。これを機会に人と森が作る生態系社会、自然との共存を目指した活動を自分たちの世代にも引き継ぎ、実践し、今後社会に出たあとも自然、森林の重要性を忘れず地域社会に貢献していきたい。

平形 駿

(経済学部 現代経済学科3年次生)

国内ボランティア体験プログラムを通して木の家ができるまでの人々の働き、思い、つながりを見て、多くの人がこの家の完成に貢献していることを思うと、ありがたさが身にしみた。森とともに暮らし森を守り育てている人。持続可能で健全な森を保持し、木を集める人。一本の原木が持つ価値を最大限に引き出すように木



材の用途に応じて仕上がりを考えながら木を選び製材する人。私の訪れたモデルハウスの生産元である一般社団法人の安曇川流域・森と家づくりの会では植栽から伐採、設計、完成に至るまでにかかわった人びとのつながりを重視し、顔の見える関係をずっと続けることをモットーの一つにしている。そのようなつながりがみえることで、住む人に安心感をあたえ、また地元の森と関わりのある暮らしをすることが実感できるのではないだろうか。

このプログラムの私の参加理由は、環境問題の現場に足を運び、そこに生きる人やものの本来の姿を、ボランティア・NPO活動センターの学生スタッフとして多くの人に伝えることだった。モデルハウス以外にも、割りばしなどの身近な木を使ったものが私たちの身の回りにはあらずだ。それには林業にかかわるさまざまな人の思いがあることを忘れずに、環境問題に触れる際、木の奥にあるものまで深く見る目を持ってもらえるよう多くの人に今回の経験を語っていききたい。

横関 つかさ

(法学部 政治学科3年次生)



「また勝手に切りおって。」これは私が今回の国内ボランティア体験プログラムで一番印象に残った言葉である。作業体験で道路沿いのヒノキを間伐していた私たちに対して、恐らく地元住民と思われる人が放った一言だ。そもそもこの間伐作業は栗東市の許可と指導の下行われたもので、無断でした訳では無いのだが、この人は「勝手に」ということよりも「木を切った」ことに対して怒っているようだった。また、このプログラムから帰った後に会った友人に「滋賀で木を切ってきた」と言ってみると、「そういうの止めてや、俺はエコ派やのに。」と返さ

れた。このプログラムに参加する前であれば私も同じようなことを思ったのかも知れないが、この4泊5日で私は森や自然に対してまともな知識を全くもっていなかったことに気づかされた。

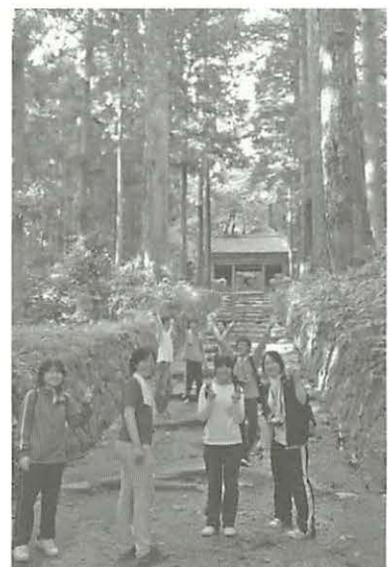
森林には水源涵養や防風、防砂など様々な役割がある。森を歩くと「〇〇保安林」と書かれた看板がたくさん見受けられ、森の公益性を感じた。しかし、人が手を加えた植林地では木が密集しているためお互いに成長を妨げあい、地面の植物に日光が届かなくなり植物が育たず、森が枯れてしまう。そうすると、森の役割が正常に機能しなくなり土砂崩れなど大災害のもとになる。また、森で生活する昆虫や動物の住居を奪うことになり、生態系を乱しかねない。間伐や雑草の手入れを怠らなければこのような事態は起こらないが、日本では生活の近代化に伴い、燃料は薪や木炭からガスや化石燃料に替わり森を生活資源としなくなり、第一次産業から第二次、第三次産業へと転換し、割の合わない林業に従事する人が減少して森に入る人が少なくなった。日本の森林問題は「人が森林を忘れた」こと自体を忘れてのことだ。

この4泊5日を見て、聞いて、感じたことがあまりにも多すぎてここに書ききれないことが非常に残念である。しかし、私はこれを忘れずに多くの人に事実を伝え、正しい選択ができる人を増やしたい。

金山 和輝

(法学部 政治学科2年次生)

今回のボランティアでは、間伐体験を主とした森林づくりを学んだ。初日は、「森林と林業の関わり」についてのお話を伺った。滋賀県では、「山の子」「海の子」といった学校教育があり、滋賀の自然を体験している。しかしこう



いったなか、林業は多くの問題点を抱えている。昔は6万～7万人の人々が林業を生業としていたが、今では1000人にも満たないほどだ。そして高齢化の問題も関わってきている。材木の価格が低いこともあり林業だけでは採算が合わないため、農業との兼業をして生活を送る必要性である。これらの問題に向き合うには、山に対しての理解と関心を持つことが解決の第一歩となる。

最終日は里山について学ぶため、「こんこん山」を訪れた。ここでは、里山を生かした利用の必要性、そしてそれを代々伝えていくことの大切さを知ることができた。里山でゴルフ場や住宅などへの開発はこれまで何度も行われてきたので、別の方法が必要となってきた。一概にこういった開発は悪いとは言えないが、里山を伝えていくためにはもともと里山にあるもの（棚田など）を利用し、里山とともに共存することが今必要になっている。里山は人が手を加えてこそ輝くものである。

引率教員講評

谷垣 岳人（法学部 講師）

8月24日は金勝生産森林組合所の代表理事組合長の宮城定右衛門氏に林業の現状について室内でご講義いただいた。引き続き滋賀県西部・南部森林整備事務所の奥田貴司氏から滋賀県の森林税や森づくり補助制度についてご紹介いただいた。

25・26日にかけて、金勝生産森林組合所の所有林において、下草刈りと間伐のボランティア体験をおこなった。一連の体験を通じて、植林

地において人が手入れをすることの大切さを学んだ。

27日は、原木が材木になる過程を知るため、大津市の株式会社伊藤源を訪問し、製材過程および木材乾燥施設を見学した。さらに安曇川流域・森と家づくりの会の県産材モデルハウスを訪問し代表理事の宮村太氏に、県産材の地材地消の取り組みについてご紹介いただいた。

28日は、地元の里山「こんこん山」において、山林所有者の澤九麻男氏より里山の現状と利活用の現状について話を伺った。

一連のプログラムを通じて、日本が森林資源国であるにもかかわらず、それをうまく活用できていない現状と、それを乗り越えて利活用する方法を学んだ。

参加した学生も非常に熱心に取り組み、我々の暮らしと森林との接点を見いだすことができたようである。

滋賀県西部・南部森林整備事務所には本プログラム実施において、様々な面で協力いただいた。この場を借りてお礼申し上げます。



○海外体験学習プログラム／タンザニア連合共和国（ダルエスサラーム、バガモヨ他）

■参加学生	
鵜川 健（法学部 政治学科 4年次生）	仲 裕子（経済学部 国際経済学科 3年次生）
河村 将仁（国際文化学部 国際文化学科 4年次生）	定岡 亜依（経済学部 国際経済学科 3年次生）
間島 仁美（経済学部 国際経済学科 3年次生）	渡辺 実香（経済学部 国際経済学科 3年次生）
左近 智子（法学部 法律学科 3年次生）	宇野 紫織（国際文化学部 国際文化学科 1年次生）
山川 勝弘（経済学部 国際経済学科 3年次生）	森脇 翔平（経営学部 経営学科 3年次生）
田中 雅美（法学部 政治学科 4年次生）	森 友寛（経済学部 国際経済学科 3年次生）
北村 将（国際文化学部 国際文化学科 4年次生）	
■引率教員、テーマ	
大林 稔（経済学部 教授）「貧困から脱出する道をさぐる」	

■行程			
日程	場所	時間	活動内容
9月1日（水）	関西国際空港	21:00 23:15	集合、搭乗手続き 空路、ドバイへ
9月2日（木）	ドバイ ダルエスサラーム	04:45 10:50 15:20	到着 空路、ダルエスサラームへ 到着後、ホテルへチェックイン
9月3日（金）	ダルエスサラーム		世界銀行事務所訪問、JICA事務所訪問
9月4日（土）	ダルエスサラーム バガモヨ ダルエスサラーム	09:00 10:00 18:30	バガモヨへ移動 到着後、市内観光 カオレ遺跡、カトリック教会 チビテ公演 民族音楽鑑賞 帰着
9月5日（日）	ダルエスサラーム		自由行動
9月6日（月）	ダルエスサラーム		KITUNDA共同組合訪問、パナソニック訪問
9月7日（火）	ダルエスサラーム		WAMATA訪問、世界銀行サイト訪問
9月8日（水）	ダルエスサラーム		JICA事務所訪問、MUHIMBILI病院訪問 SACCOS MLANDIZI 訪問
9月9日（木）	ダルエスサラーム		Buniju SCHOOL 訪問 KIGOGO HOME 訪問
9月10日（金）	ダルエスサラーム キンゴルウィラ村	09:00 12:00	ミニバスにて移動 到着、農村滞在
9月11日（土）	キンゴルウィラ村 ミクミ国立公園	13:30 15:00	農村滞在 ミニバスにて移動、 到着後、ゲームドライブ
9月12日（日）	ミクミ国立公園 キンゴルウィラ村 ダルエスサラーム	11:00 13:00 18:00	ゲームドライブ キンゴルウィラ村に移動 ダルエスサラームに移動 到着
9月13日（月）	ダルエスサラーム		自由行動
9月14日（火）	ダルエスサラーム	16:50 23:20	自由行動 空路、ドバイへ 到着
9月15日（水）	ドバイ 関西国際空港	03:10 17:20	空路、関西国際空港へ 到着後、解散

鵜川 健

(法学部 政治学科4年次生)

今まで出会った外国人とは全然違う何とも言えない陽気さから、この国の人たちはどういう人なのか、これからどのように発展していくことが彼らにはいいのかを少しながら考えさせられた。そしてそれはタンザニア民族チビテの民族音楽の公演を見たときにも感じた。

その公演にはアフリカの文化があり、チビテはその文化を商売にして演奏料やお土産を売って暮らしていた。このまま経済成長すれば、このすばらしい文化を持つ民族がやがて影響を受け民族はバラバラになってしまい、演奏だけが文化として残るのではないか。そうなってしまえば経済成長をしなくとも幸せであったこの民族の暮らしはどこへ行くのだろうか。そのような経済成長がこの国にとって必要なのだろうか。

タンザニアという国には、今までの先進国が辿ってきたような経済成長ではないものが求められているのではと感じた。



河村 将仁

(国際文化学部 国際文化学科4年次生)

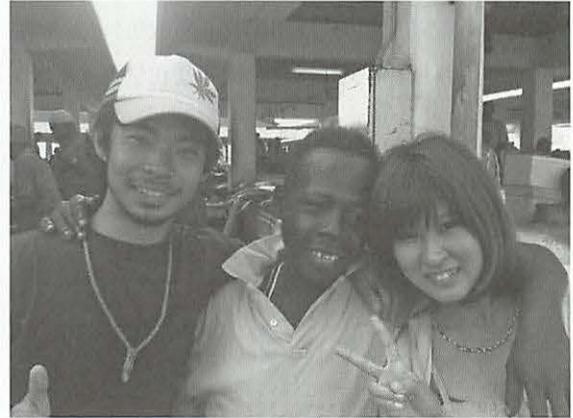
帰国直前、私は買い物をして街へ繰り出しました。気づいたらある少年がついて来て、ひたすら私に語りかけてきました。"チャクラ、チャクラ"と。チャクラはスワヒリ語で"食べ物"という意味です。

貧しい人がいても施しは絶対にしてはいけなと心に決めていましたが、いざ自分ごとになったときにこんなにも辛い事だとは思ってもありませんでした。私はかばんを開けて食べ物を持ってないことを示し、追いかけてくる少年を振り切って逃げました。

施しをして一時的に命を永らえられるかもし

れないし、逆にこの貧困から抜け出せなくさせているかもしれません。日本人がキリマンジャロコーヒーを飲むために安い賃金で働かされているタンザニア人がいるかもしれません。それでもこれが現実です。

大事なことは、誰かの命を犠牲にしてまで生きている自分の命をどう使うかということだと私は思います。



間島 仁美

(経済学部 国際経済学科3年次生)

今回のツアーで、マイクロファイナンス・現金移転を行っている組織への訪問や、実際にそのような融資を受けている方々の、生の声を聞くことができ、たいへん貴重な体験となった。

一番印象に残っているのは、融資を受けるコミュニティが組織や政府に押しつけられることなく自分たちで考え、行動していることだ。組織は彼らに強要はしない。ビジネスの提案等はするが、最終決定権を持っているのは、実際お金を使うコミュニティなのである。

タンザニアにおける様々なプロジェクトは、確実に、貧困者と呼ばれる人たちにいい意味での影響を与えてきたといえる。近年から導入されたcash transferも、まだはっきりとした結果



が見られないものの、今後の成果に期待したい。

現在、タンザニアの失業者率は50～60%といわれている。この取り組みによって、彼らが自らビジネスを始め、自立し、そして次の人へ、次の人へと繋がっていくことを願っている。

左近 智子

(法学部 法律学科3年次生)

私がタンザニアに到着した時は、日本にいる時から本や映像によって持っていた、荒れ、整っていないアフリカのイメージよりも、はるかに経済の中心地であるダルエスサラームは発展しているという印象を受けました。しかし、その印象も最初だけであって、発展している地域はほんの一部だけであり、貧困は経済の中心地であってもこんなにも顕著に存在しているのだとタンザニアの現状を目の当たりにしました。

また、先進国である日本での生活とはかけ離れているタンザニアの生活に、最初は困惑してしまいました。特に不便であると感じたのは水道です。日本では一日に使う水の量に制限などあるわけなどなく、水道を捻れば殺菌・消毒がなされた綺麗な水が出てくるのが当たり前で、資源の大切さを日本で実感したことなどありませんでした。ありきたりな言葉ですが、綺麗な水が生活で使えることがどんなに恵まれていることなのかを、身をもって実感しました。



山川 勝弘

(経済学部 国際経済学科3年次生)

私が得たことは三点ある。初めに、私は貧困に対しネガティブな考えしか持っていなかったが、私はそこで懸命に生きている人々と暮らすことでそれは一面的であったとわかった。また、村全体にある一体感を感じた。自分たちが普段生活している場所と比較することで人と人との

つながりの大切さや温かさがこれほど重要であると初めて学ぶことが出来た。

次に、先進国の私たちにも出来ることがあるということ。先進国で高等教育を受けている人たちのテクノロジーを使って貧困削減に貢献するBOPビジネスも彼らにとって生活向上に役立つ。アフリカのフロンティアに対して私たちが培ってきた技術を輸出出来ると思う。

最後に、発展途上国が市場原理を得て、先進国に向け着々と進んでいる様を恐ろしいほどリアルに肌で感じる事が出来た。知識労働者の生産資本は知識のみであり、それを雇用者に売ることで雇用関係が成立する。知的労働者は200人規模の工場の場合、多くても10人程である。雇用募集口と雇用希望者の需給ギャップが広がっている。はたして先進国の方が正しいのか、発展途上国のままの方が正しいのか。卒論のテーマとしても参考にしたい。



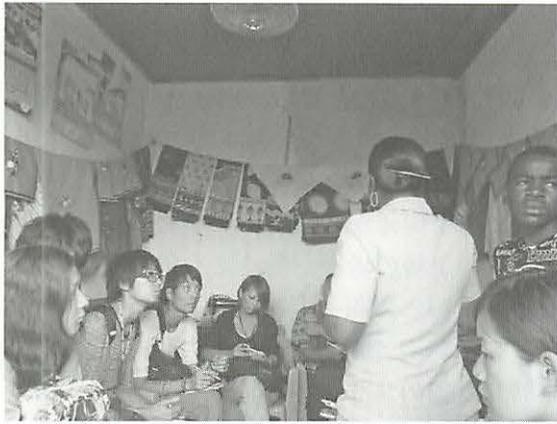
田中 雅美

(法学部 政治学科4年次生)

タンザニアはここ数年で経済成長を続けているが、貧困削減にはあまり結びついていないそうだ。キバハ村では、政府の支援や教育の下、村の会合で現金移転の援助を受ける家庭を決定し、その運営・管理も村民による委員会が行っている。だが、それでも1つの家庭に支給される金額は決して大きくはなく、村全体が発展していくため、また援助が必要なくなるレベルに達するまでに、どれほどの時間を要するかは想像もつかない。

現地へ赴いて強く考えることは、「彼らは貧しくて不幸せそうか」ということである。答えは当然NOである。むしろ多くの人が行き交い、交流しているタンザニア人の方が、日本人より幸せを感じて生きているのではないかと思う。

タンザニアの人びとの生活は、日本人が考えがちな「お金があること＝幸せ」という考え方を崩してしまうのではないだろうか。日本には何が幸せなのかもわからず、不安を抱えて日々を過ごす人が多くいる。そんな私たちは、タンザニアの人びとから笑顔で生活する術を学ぶ機会を持つべきだと思った。



北村 将

(国際文化学部 国際文化学科4年次生)

私は少なからず、タンザニアは貧困の国であり、人々は苦しんでいるのであろうと考えていた。これはおそらく、事実でもあるだろう。しかし、そこに住む人々、大人も子どももいい笑顔をしていた。本当に心からの笑顔をしていた。目がきらきらしていた。私はこれが何よりも衝撃的であった。

一番印象に残ったのはチビテの民族音楽や踊りである。私は今までにないほどの感動を覚えた。こんなにいい文化はぜひ残ってほしいし、もっとたくさんの人々に見てもらいたいと思うようになった。それを残していくために世界で「文化祭」みたいなものを開いてもっとたくさんの人に文化の楽しさにふれてもらいた



い。そうしたら、おのずと私が考える子どもに自慢ができる笑顔があふれる世界が作れると思った。本当に私の人生において大きな糧となる時間を過ごすことができた。これを一人で持つのではなく、たくさんの人に伝えて、共有していきたいと思う。

仲 裕子

(経済学部 国際経済学科3年次生)

今回の海外体験学習プログラムの目的に「貧困者の自立への努力を知ること」とあるように、様々な環境にいる人々が、貧困削減、生活向上、自立のための様々な取り組みを学びました。援助している側とされている側の両方を見ることができて、どのような構造で動いているのかがよく分かりました。まず、世界銀行は小さいプロジェクトからはじめ、それを評価→改善→拡大という風に様々なプロジェクトを立ち上げていました。そのプロジェクトの一つがタサフというもので、今回タサフが行なっている現金移転をしているサイトに行き行って話を聞きました。それからサコスという共同組合が行っているマイクロファイナンスの話、その制度を利用して商売をしている人の話、JICAが行っている国際協力や、その支援を受けて改善している病院・孤児院の見学、BOPビジネスをしているパナソニックの話、伝統のパフォーマンスをするチビテ公演・・・共通してそれぞれが貧困削減、生活向上、自立のために工夫しているということが心に残りました。

この海外体験学習プログラムで得た一番の功績は、自分の将来の夢ができた事だと思います。日本に帰ってきて、その夢のために努力すると共に、これから残りの大学生活を無駄にせず、頑張っていきたいです。このプログラムは私の



人生にとっても大きな影響を与えたものになりました。

定岡 亜依

(経済学部 国際経済学科3年次生)

このプログラムに参加し、ダルエスサラーム滞在一日目で、道で物乞いをしている身体障がい者の多さ、日本の中古バスの多さ、銃を持った警備員等、様々なことに驚きました。日本では見られないようなこと、体験できないようなことを実際に体験することができて、いい経験になりました。世銀事務所やJICA事務所に訪問させていただくことができ、実際にお話を伺って、本当に勉強になりました。しかし、こんなにもプロジェクトが存在し、貧困削減、保健セクター改善等に力を入れているのに追いついていない現状は、問題の大きさや、貧困規模の大きさを物語っていると思いました。農村滞在では、日本にはないような良さを感じました。今後、具体的にはまだ考えてないですが、この経験を何かに活かしたいと思います。

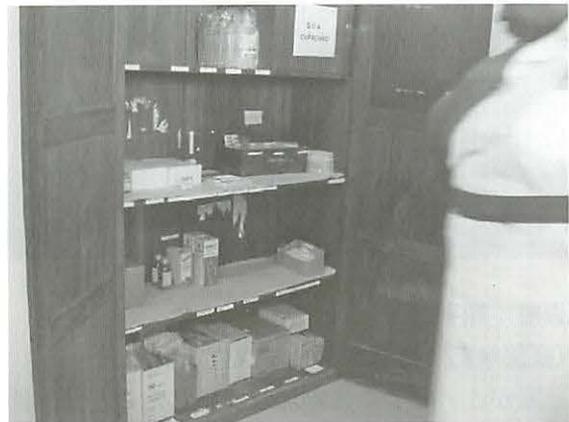


渡辺 実香

(経済学部 国際経済学科3年次生)

今回このプログラムへ参加し痛感したことは、やはり肌で感じる事が一番の勉強法であるということです。'貧困'について日本でいくら学んでも何かを間に通して学んでいるには変わりないのです。私は孤児院訪問時に会った子供の顔が忘れられません。そしてその孤児院が今年いっぱい閉鎖すると聞いたとき、日本で何かできることはないか、と考えました。私には募金活動をする事や、皆にこの施設の存在を知ってもらうことしか思いつかないのですが、ぜひこれらのことを行動に移すことができると考えています。

残念なことをいうと、私たちはある程度整った環境を用意してもらっていたにも関わらず、それを苦痛だと感じていたことです。自分が先進国である日本においていかに甘い生活を送っていたのか知り、心の内で恥すら感じました。そして日本でもこの感覚を持ち続けねばと思いました。



宇野 紫織

(国際文化学部 国際文化学科1年次生)

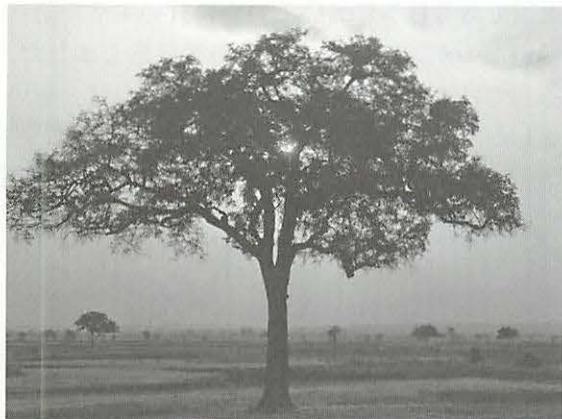
私はこのツアーに参加し、「最貧国」とはどのようなものかを目で見て、感じたい、と考えていました。タンザニアには物乞いをする人も、お金を得るために旅行者から強盗する人、嘘をつく人もいました。道路はゴミだらけで、舗装もされていないところも沢山ありました。

心を痛める事は沢山ありましたが、それをもしのぐタンザニアの素晴らしさを発見することができました。特に、なぜそんなに笑えるのかと思うくらいのタンザニアの人々の屈託のない笑みは、忘れることができません。少しでも「上」からタンザニアを見ようとしていた私には、眩しすぎました。

スワヒリ語で「ハクナ・マタタ」＝「心配するな、大丈夫だ」という意味の言葉があります。



サファリでは、自分がちっぽけだと思ふ反面、この自然が全てを包み込んでくれているという安心感があり、まさにハクナ・マタタでした。



森脇 翔平

(経営学部 経営学科3年次生)

私がこのツアーに参加して感じたことは、世界は繋がっているということです。さまざまなことを勉強していくにつれて、日本人がタンザニアで援助協力をしていたり、日本のお金がタンザニアのために使われていて、そのお金がちゃんと現地の人々のためになっていることを目の当たりにしたり、タンザニアの人々と話して仲良くなったりしたことで、本や先生の話からでは感じられないリアルなものを感じることができて急に身近にタンザニアを感じることができたからです。ただ、研究の対象としてではなく、日本からは遠く離れているから関係ないと思うのでもなく、現地の人々のことを知り、その人々がなにを欲しているのかを考えることが大切だと思いました。これらの経験を基に、もっともっと勉強をして、現地でふれあった人々のことを考えながら我々ができる最良の援助の方法を自分なりに日々、探求していきたいと思います。

森 友寛

(経済学部 国際経済学科3年次生)

9日目にストリートチルドレンの職業訓練学校を訪問する機会があり、その学校の生徒に聞いたのですが、多くは生活苦が原因のようであり、やはり貧困が大きな陰を落としていることが伺えました。ストリートチルドレンの存在は私としても非常に大きな課題であり、早急に解決すべき課題のうちの1つであると考えます。また今回訪問した職業訓練施設は資金不足によ

り今年度で閉鎖するようであり、この問題に関しては私たちが訪問したストリートチルドレン収容施設だけの問題ではなく、タンザニア各地の収容施設でも同じような問題が発生している場合があり、早急な調査が必要とされているのではないのでしょうか？

依然タンザニアには多くの課題が存在し、その多くが支援を必要としています。自分自身が貧困者に対しどのような支援をしていけばよいか考えさせられるような貴重な体験をすることが出来たツアーでした。



引率教員講評

大林 稔(経済学部 教授)

本プログラムは、アフリカにおける人びとと暮らし、および貧困と自立への努力を知ることが目的とした。この目的達成のために、①農村での民家滞在や文化交流、②貧困者の自立支援事業への訪問を実施した。訪問対象事業は、マイクロファイナンス・現金移転・BOP事業、元ストリート・チルドレン養護施設、HIV/AIDS患者支援NGOなどである。訪問との調整には、世界銀行・JICA現地事務所、現地旅行社JATAの尽力を得た。またJATAにはスワヒリ語通訳兼添乗員を提供していただいた。

参加者は、事前にアフリカの貧困、タンザニアの政治経済文化、マイクロファイナンス、BOPについて研究会を開き、さらに帰国後、参加者は絵画展「あなたにできること～タンザニアの子供たちの絵から未来を描く～」(2100年1月29・30日)を京都市国際交流会館で開催した。http://www.kyoto-minpo.net/event/archives/2011/01/29/post_3164.php

この絵画展は、訪問先のストリート・チルドレン養護施設が資金不足から閉鎖されたため、こどもたちの絵画を展示・販売して支援するも

ので、現在もこの活動は継続中である。また参加者の一部は、体験学習の成果を踏まえて経済学部討論会で発表を行い、好成績を収めた。

参加者は、ほぼ全員がアフリカ訪問は初めて（一名は事前に現地NGOにインターンとして滞在）で、短時間にも関わらず深く広い経験を通し、実践的で深い知識を獲得したと同時に、国際協力へのモチベーションを向上させた。また参加者は、訪問先との交渉、滞在中の活動、帰国後の絵画展開催を通じて、英語力も含め目覚ましい社会的能力の向上を示した。

本ツアーにおける参加者の高い自発性と参加者数の多さ（13名）は、国際協力とりわけアフリカに対する関心の高まりを反映したものと考えられる。参加者は自立的運営を学びつつ成長したため、その過程で現地の旅行社、関係諸機関に多くのご負担をおかけした。お詫びすると

同時に、青年育成にかけるその熱意に感謝したい。

今後の課題として、以下の三点をあげたい。

- A. 参加負担の軽減：アフリカは遠隔であり、予防接種等の諸費用も高いため、実質参加額は30万円近くと、他地域に比べ格段に大きい。アフリカへの関心は高まりつつあり、負担減への措置が望まれる。
- B. 広報の刷新：企画の学生への周知が十分ではなく、関心の高さに比べて説明会への参加が低調である。学部掲示板、ホームページ、ゼミ連絡、SNSなどを活用し、学生100%への100%を期すべきである。
- C. 準備期間の延長：募集と実施までの間が短く、事前学習および訪問先と連絡・交渉する時間が十分取れない。募集時期を早めることが望ましい。

○海外体験学習プログラム／スリランカ民主社会主義共和国(ハプタレー、シーギリア他)

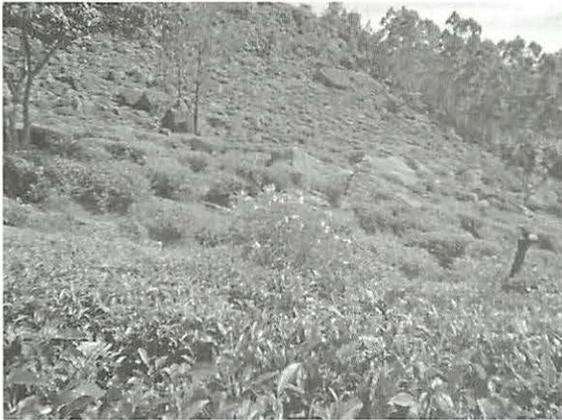
■参加学生	
小西 和成 (経済学部 現代経済学科 3年次生)	佐山 優貴 (経済学部 現代経済学科 3年次生)
北村 仁志 (経済学部 現代経済学科 3年次生)	北本 美穂 (経済学部 国際経済学科 4年次生)
大内 紹子 (国際文化学部 国際文化学科 4年次生)	吉田 裕貴 (国際文化学部 国際文化学科 1年次生)
前 知里 (経済学部 現代経済学科 4年次生)	樋口万里菜 (経済学部 現代経済学科 3年次生)
■企画運営団体、テーマ	
特定非営利活動法人 JIPPO 「自分の目で、心で感じるフィールド調査」を学び、「豊かさとは何か」を考える	

■行 程			
日 程	場 所	時 間	活 動 内 容
8月19日(木)	関西国際空港	09:45	集合、搭乗手続き
	バンコク	11:45	空路、バンコクへ 到着
	コロンボ	20:45	空路、コロンボへ 到着後、ホテルチェックイン
8月20日(金)	コロンボ シーギリア		シーギリアへ移動 シーギリア博物館見学、シーギリアロック登頂
8月21日(土)	ダンブラ		ダンブラ石窟寺、スパイスガーデン見学
	キャンディ		キャンディへ移動 ベラヘラ祭見学
8月22日(日)	キャンディ		仏歯寺見学 ハプタレーへ移動
8月23日(月)	ハプタレー		グリーンフィールド農園農場・加工場見学、茶摘み体験 リプトン農園と加工場見学
8月24日(火)	ハプタレー		ハプタレー幼稚園竣工式 コロンボへ移動
8月25日(水)	コロンボ		自由行動
8月26日(木)	コロンボ	01:40	空路、バンコクへ
	バンコク	06:35	到着
		11:00	空路、関西国際空港へ
	関西国際空港	18:30	到着後、解散

小西 和成

(経済学部 現代経済学科3年次生)

今回のプログラムは自分にとって、とても収穫のあるものだった。実際自分でいくことにより、その国の現状、歴史が分かった。スリランカは私が思ったよりも治安が良かったが、車のマナー、歩行者のマナーがとても悪かった。交通に関する本を送ったり、講習を開いたりして車の危険性について教えたいと思った。また、グリーンフィールド農園・リプトン農園訪問は今後のゼミ活動に大きな転機になった。両者の農園を見て、はたして有機無農薬はグリーンフィールド農園の労働者のためになるのか、農薬を使った方が売れるのであれば、農薬使用もやむを得ないのだろうかとも思った。両農園の住宅の差、収入の差は資料を読むだけではわからないものだったのでわかってよかった。



北村 仁志

(経済学部 現代経済学科3年次生)

グリーンフィールドの労働者とリプトンの労働者の待遇の違いに驚きました。前者のお茶は無農薬、後者のお茶は農薬を使って作っています。お茶を摘み取りしてのお給料は同じなのですが、グリーンフィールドの労働者は副業の野



菜作りでも農薬を使うことができません。スリランカではまだ日本のように農薬に対して健康の危険があると感じている人が少なく、割高の無農薬野菜より普通の野菜のほうが売れるのです。無農薬での栽培はグリーンフィールドから茶葉を輸入している側の要求です。このため、労働者はかなりひどい生活を強いられています。これは重要な問題です。私たちの勝手な要求で現場の労働者がひどい生活になっているのです。この現状を、茶葉を輸入している人が正確に把握している必要があると思いました。

大内 紹子

(国際文化学部 国際文化学科4年次生)

スリランカへ来て『本当の豊かさ』についてわかったことは、笑顔ということです。私は誰もが感じれる幸せは、笑顔にあると思いました。生きていくには、収入が必要かもしれません。しかし、収入ばかり、モノばかり追い求めては、大事な心を忘れていきます。日本人は「ワレタダ タルヲ シル」と龍安寺にあるように、私たちは求めるばかりではなく、もう十分に足りていることに気付くべきだと思いました。そうすると、心に余裕ができ、今在るものへ感謝の気持ちが生まれてくるのではないのでしょうか。そこで私は、まず自分の行動や他人に対しての接し方を見直して改善していこうと思いました。これからさらに考えを深めていきたいと思っています。



前 知里

(経済学部 現代経済学科4年次生)

「このままこちらの都合で無農薬を徹底するのか、労働者の生活水準の向上をめざすのか。」JIPPO専務理事である中村尚司先生が私たちに投げかけた言葉です。私はこの言葉の真の重み

を知ることとなりました。生産者にも消費者にも身体に優しいものは無農薬です。そして周辺環境、人体への影響という面でスリランカが発展途上国から先進諸国と世論に位置づけられるときに必要となっていくものでしょう。しかし現状は小さな町、そして一つのエリア内でも生活水準の格差が存在していました。『今』を考えると後世への負担を覚悟した上で地域内格差を縮めることを先決に進めるべきなのかもしれません。このプログラムではその明確な答えは出せませんでした。しかし少なくとも私の中に新たな概念をもたらしてくれたことは事実です。私はこの経験を忘れることなく未来を作るために日々を歩んでいきたいと思えます。



佐山 優貴

(経済学部 現代経済学科3年次生)

事前に紅茶プランテーションとその労働者について調べてはいたものの、実際茶園に行って現状を目の当たりにして、改めて考えさせられることがたくさんあった。一番深く考えさせられたのは、グリーンフィールド農園の労働者の生活水準である。ぼろぼろのトタン屋根の小さな家に家族が5人も6人も住んでいるのには衝撃を受けた。グリーンフィールドに有機栽培を



強要しているのは先進国であるわれわれである。つまり労働者に今のような生活を強いらせているのはわたしたちだ。目の前に現実を突き付けられてしまい、とても申し訳ない気持ちになった。先進国と発展途上国との関係性から見直されるべきなのではないか。利益がもっと労働者に還元される仕組みの必要性を感じた。

北本 美穂

(経済学部 国際経済学科4年次生)

ハプタレの幼稚園の落成式に行った際、セレモニーで司会の方がシンハラ語、タミル語、英語で話されていて、地域住民にはキリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教、仏教徒がいて、それぞれのお祈りがされていました。日本では見ることの出来ない光景であり、驚きました。グリーンフィールドの労働者がフェアトレードの資金で建てたコミュニティホールにもヒンドゥー教と仏教の結婚式の飾りが置いてありました。グリーンフィールドの工場の近くにはキリスト教の教会もありました。スリランカの歴史を見てみると、イギリス植民地時代やインドや東南アジアなどからの宗教文化が混在し、多様な文化を受け入れてきた結果であると言えます。宗教観についても新しい発見でした。



吉田 裕貴

(国際文化学部 国際文化学科1年次生)

スリランカの人たちからは生きるパワーを感じた。みんな前を見て明るく歩いているなど思った。日本の方が確実に恵まれた生活をしているのに生きるパワーは圧倒的にスリランカの方が強いと感じた。私はなぜこんなに差があるのか考えた。一つは時間の流れるスピードではないかと思う。時間に自分を合わせるのではなく、自分に時間を合わせることは日本人に必要

なことなのだろうなと思った。またもう一つは自然の多さだと思う。自然は人に力を与えてくれる。心からそう思えるような場所がスリランカにはたくさんあった。一昔前までは日本もそのような場所がいっぱいあったと思う。しかし日本は先進国の仲間入りを果たすと同時に自然を失っていったし、今も破壊は進んでいっている。これは日本だけではないことであるが、やはりそのようなことも日本に元気がない要因ではないかと思う。

今回は私にとって初めての途上国であった。日本に住んでいる私には驚きと発見の連続だった。日本に在るだけでは絶対にできないような経験が出来た。この経験を経験で終わらせてはいけない。これからの人生に活かしたいと思う。どのように生かすかはまだ私にはわからない。これからの大学生活の中で考えていきたいと思う。また機会があればスリランカやその他の途上国にも行きたい。大学生のうちに行って今回気が付かなかったことに出会い、勉強したいと思う。



樋口 万里菜

(経済学部 現代経済学科3年次生)

このスリランカのプログラムを通して、考えさせられることが多くあった。まずはスリランカの人々の暮らしと日本の私たちの暮らしの違いである。スリランカでは経済面の格差がはっきりと目に分かる。しかしそういう貧しい生活の中でも、スリランカの人々はすごく素敵な顔をしていた。市場はすごく活気があって、あいさつするとたいていの人が笑顔で返してくれる。日本ではあまり無いことだと思った。日本も一度日常を見直すべきだと思った。

もう一つこのプログラムに参加して、フェアトレードとは何かを改めて考えるようになった。フェアトレードで得られるお金は個人には還元されない。今までフェアトレードのことをなんとなく知っていたつもりでいたが、全然理解できていなかったと痛感した。フェアトレードとは何なのか、なぜ行われているのか、その地域の人が何に困ってフェアトレードを行ったのか、得られた利益はいったいどのように利用されたのかなど、フェアトレードのことをもっと掘り下げて理解したい。



○海外体験学習プログラム／ネパール連邦民主共和国（ポカラ、クンタ、カトマンズ）

■参加学生
松田 和奈（社会学部 コミュニティマネジメント学科3年次生）
■企画運営団体、テーマ
財団法人 PHD協会 「日本で学んだ研修生の村の生活を体験！」

■行程			
日程	場所	時間	活動内容
8月18日（水）	関西国際空港	22:00	集合、搭乗手続き
8月19日（木）	関西国際空港 バンコク	00:30	空路、バンコクへ
		04:20	到着
	カトマンズ	10:15	空路、カトマンズへ
		12:25	到着
8月20日（金）	ポカラ	15:00	空路、ポカラへ
		15:30	到着後、ペワ湖へ
8月20日（金）	ポカラ		研修生の活動見学、市内観光
8月21日（土）	ポカラ カトマンズ	09:50	空路、カトマンズへ
		10:20	到着後、市内観光
8月22日（日）	カトマンズ クンタ		バスでクンタへ移動 到着後、小学校訪問
8月23日（月）	クンタ		次回研修生選考
8月24日（火）	クンタ		研修生活動見学
8月25日（水）	クンタ カトマンズ		バスでカトマンズへ移動、バクタプール立寄
8月26日（木）	カトマンズ バンコク	13:30	空路、バンコクへ
		18:15	到着
		23:30	空路、関西国際空港へ
8月27日（金）	関西国際空港	07:00	到着後、解散

松田 和奈

(社会学部 コミュニティマネジメント学科3年次生)

このプログラムに参加して“世界観の広がり” “同じ土地でも見られる生活の格差” “家族の温かさ” の3つを主に感じました。今回訪れたネパールのような日本と比べて生活水準が低い所に行ったのは初めてでした。日本は世界の国に比べても経済が発展しており、生活はとても裕福であるとすごく感じました。一方で、人としての豊かさについて考えさせられました。経済発展と共に失われていく人としての本当の幸せとは…今回のボランティアに参加してここには書ききれないほどの多くのことを学び感じると

共に、新たな発見や疑問が生まれたボランティアでした。



○海外体験学習プログラム／アメリカ合衆国（グアム島）・パラオ共和国

■参加学生	
麻生 堯宏（経済学部 現代経済学科 2年次生）	秦 照頭（経済学部 現代経済学科 2年次生）
阿部 峻亮（文学部 史学科 2年次生）	水野 琢磨（経済学部 1年次生）
尾上なつ美（国際文化学部 国際文化学科 1年次生）	三好真知子（法学部 政治学科 1年次生）
笠松 由衣（文学部 哲学科 2年次生）	森江紗矢佳（国際文化学部 国際文化学科 2年次生）
中川 司（経済学部 国際経済学科 2年次生）	
■引率教員、テーマ	
松島 泰勝（経済学部 教授）「島嶼社会における自立と共生を考える」	

■行程			
日程	場所	時間	活動内容
2月14日（月）	関西国際空港 グアム	09:00	集合、搭乗手続き
		11:00	空路、グアムへ
		15:30	到着後、ホテルチェックイン、ホテル周辺散策
2月15日（火）	グアム		グアム大学訪問、学生との交流 グアム商工会議所幹部へのインタビュー チャモロビレッジ、文化施設見学
2月16日（水）	グアム		老人ホームにてボランティア 日本総領事館総領事へのインタビュー ビーチクリーンアップ・ボランティア
2月17日（木）	グアム パラオ		グアム大学、環境保護・人権擁護団体メンバー（グアム 大学教授）、元グアム議会議員さんへのインタビュー グアムの開発予定地、軍事基地等の視察
		19:55 20:55	空路、パラオへ 到着後、ホテルチェックイン
2月18日（金）	パラオ		日本大使館全権大使へのインタビュー 大使館専門調査員と昼食 JICAパラオ支所ボランティア調整員へのヒアリング ユネスコパラオ事務所所長へのインタビュー
2月19日（土）	パラオ		日本人学校補習校で文化交流 国際サンゴ礁センター、コロール州リサイクルセンター・ ごみ処分場訪問 パラオ博物館、首都政府庁舎訪問
2月20日（日）	パラオ		エコツアー ジェリーフィッシュレイク・ロックアイラ ンド
2月21日（月）	パラオ		クニオナカムラ元大統領へのインタビュー 老人センターでの交流 パラオ短期大学学生との交流
2月22日（火）	パラオ グアム 関西国際空港	02:35	空路、グアムへ
		05:30	到着
		07:20	空路、関西国際空港へ
		10:00	到着後、解散

麻生 堯宏

(経済学部 現代経済学科2年次生)

今回の海外研修プログラムで、基地が観光や環境にどのような影響を与えるのかを色々な方々の意見を聞き学ぶことができたのではないかと感じた。沖縄の基地問題もあってか基地に関して僕自身もあまり良いイメージはなく、基地には反対だった。基地賛成側では地域との共存を目指しており、文化的に大切な場所は反対するが経済発展のため活動しているということであった。一方で反対派としての意見では、これから海兵隊やその家族などがくるという人口増加による環境問題を心配していた。グアムではこういった基地の問題が人々の生活や環境にも大きく関わっていると実感した。

自立するにしても起こってくる問題、そして島嶼社会での主な産業は観光業であるが、観光をうまくしつつ環境を守っていくということの共生の難しさを改めて感じさせられた。また国と国の関係がどんな影響を与えるのかなどを沢山の話を伺うことが出来た。今回の研修で学んで終わりではなく、これから社会に生かせるように考えていかなければいけない。



阿部 峻亮

(文学部 史学科2年次生)

特に印象に残ったインタビュー結果について書きたいと思います。

ユニセフパラオ事務所所長のSharon Sakumaさんのインタビュー結果です。パラオでは幼児保護プロジェクトを推進しています。子供が受ける暴力、子供が行う暴力に目を向け考え調査を行っています。その暴力をどのように見つけるかという、子供に対して観察インタビューを行い、その中で社会サービス、法律、などを考慮し考えるのです。Sharonさんは、

国連で働くことは大きな挑戦であり国連の枠組みの中でしか活動できないけれども、そのなかでパラオ政府との調整をしていくのは大変であると語っていました。私は一人でこの大きな仕事をこなしているSharonさんを見て、自分もこんな人になればという一つの目標を立てることができました。

今回の海外体験学習プログラムで、学んだこと、経験したことはたくさんありました。しかし一番私に影響を与えたのは、やはり人と人とのつながりでした。この人のようにになりたい。この人の考え方はすごいといった、自分が持っていないものをたくさん持っている人たちに会い、関わりをもてたことがこのプログラムで私が得た一番大きな成果だと感じます。



尾上 なつ美

(国際文化学部 国際文化学科1年次生)

グアムは、米軍基地問題や環境、経済面などでさまざまな問題を抱えている。たくさんの方にインタビューをして基地拡大問題についてそれぞれの意見を聞かせてもらった。基地拡大は国の経済にとってはプラスになるが、環境面ではマイナスだ。私自身は基地を増設することどちらかというところでは反対であるが、どちら側の意見もグアムのためを思っていることだと理解できた。グアム自体はアメリカ本国に対してほとんど自決権がなく、合衆国がほぼ一方的に決定したようだ。「WE ARE GUÅHAN」というNPO団体はアメリカ・グアムの両政府に対して訴訟を起こしているようだ。そういった団体が増えればグアムの自然や人々は守られるのではないかと思う。また、グアムの住民だけでなく、観光客に多い私たち日本人など、外の人間もアクションを起こすべきだと感じた。

また、パラオという国は国の財政のほとんど

をアメリカなど外国からの支援に依存していたが、近頃その支援も削減されるという。いまパラオ政府はエネルギー改革やゴミ問題への対応、自然保護など、島の自然をそのままの状態に財政の危機を救う方法を考えている。あの美しい自然を保ちつつ、国の財政を守る方法をなんとか見つけてもらいたい。



笠松 由衣

(文学部 哲学科2年次生)

パラオでは、地元の方のなかに観光客が交ざっているという感じで、まだメジャーな観光地ではないことが伝わってきた。また、ホテルやお店の従業員は、パラオ人よりもフィリピンや台湾などから来た外国人労働者の方が多かった。なぜなら、パラオには4年制大学がなく短期大学があるだけなので、グアムやハワイにある大学へ行き、そのまま移り住んでしまうからである。そんなパラオをもっと成長させるには、やはり美しい自然を売りにした観光業しかない。しかし、観光業を発展させるには、グアムの基地拡大のデメリットと同様に、自然保護が難しくなってくる。

2カ国とも観光業をメインに成長しているが、早まってしまうと次々自然が破壊されてし



まう。それでは一時の産業と成りかねない。いかに自然を保ちつつ基地拡大や観光業を進めていくかが、最大の問題である。

このプログラムで、島の美しさとその島が抱える問題を知り、もっと他の島国にも訪れたいと思った。また、海外で働く日本人にもたくさん出会い、日本に閉じこもらずに世界へ飛び出す行動力も大切だな、と感じた9日間だった。

中川 司

(経済学部 国際経済学科2年次生)

パラオは環境と経済がとても密接な関係を持っていると感じた。パラオに旅行に来る外国人のほとんどはマリンスポーツに偏っている。もし海が汚くなってしまえば、観光客が激減してしまうのである。また観光客が増えるとゴミが増えて海が汚くなってしまふ可能性もある。その観光客が出すゴミの処理にたくさんの金をかけることは難しいといった状況である。

しかしパラオ大使館の辻氏がこの問題に関して言った事は、ゴミを海外へ売るという方法である。そうすると再利用なので環境にも良く、ゴミが出ても金に換えることができるという2つの利点がある。また今後はマリンスポーツの観光客だけでなく、他の種類で観光客を呼んでいかなければならない。話を聞いたほとんどの方がパラオの文化的、伝統的な一面も観光客に見てほしいと言っていた。

このように、どこに手をつけたらいいかわからない問題を改善しようと考えている方々の話を聞き、自分の視野の狭さに悔しさを覚えた。ゴミという非生産的なものを生産的なものに変える、このような考えを今後は自分も思いつくように努力していかなければならない。また今回は話を聞いても納得するだけで反論が浮かば



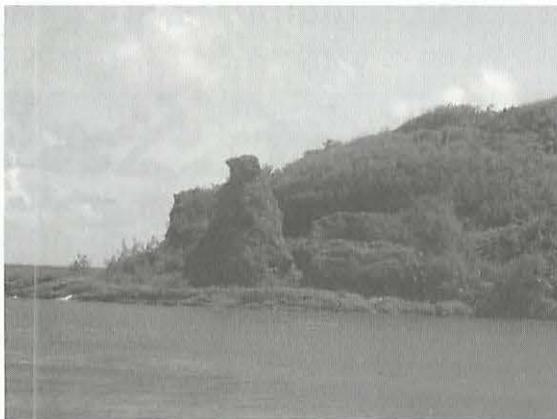
なかったので、次にこのような機会があれば自分の意見をもっと出せるように今後大学生活を送っていかねばならない。

三好 真知子

(法学部 政治学科1年次生)

グアムで私が一番心に残っていることは日本総領事館でインタビューした木村さんのお話。グアムでは戦没者を弔う慰霊祭が一年に一度行われる。しかし、日本からのグアムに対しての謝罪は戦後これまで一度もなかったという。そんな中、初めて慰霊祭に出席し謝罪のスピーチを述べられた。木村さんは自分がスピーチすることに良い反応が返ってくるとは思っていなかったが感謝されたという。グアムの人々の口癖は「忘れないけど、許す」という言葉だと教えていただいてとても心が熱くなった。木村さんはそれをきっかけにグアムの人々と交流を深められたそうだ。もっと心のつながりを作っていきたいとおっしゃっていた。しかし、心のつながりというのは目に見えるものではなく、成果が顕著に表れるものではない。それゆえに心のつながりはグアムと日本の関係だけに限らず、もっとも私たちが大切にしていけないといけないものであるのではないかと思った。

私はこのプログラムを通して、色んな意見を持つ人がいて、どれが正解かを定めることはとても難しいことで、自分はどう思うのかを自分の意見をもって伝えることの大切さ、人と人とのつながりの大切さを学ぶことが出来た。私は自分の視野を広げることが出来たと思う。これからは積極的に自分にプラスになる経験をしていきたい。



森江 紗矢佳

(国際文化学部 国際文化学科2年次生)

グアムとパラオにはいくつかの類似点がある。観光業が主な産業であること、島嶼社会であること、アメリカと密接な関係があることなどである。しかし似た環境にありながら、グアムは独立さえできないままである。その大きな理由は、グアムが軍事的な利用価値が高いからだといえる。

次にパラオの財政についてだが、パラオは国家予算の約半分をアメリカの援助に頼っている。そして観光業以外に主だった産業もないため非常に公務員が多い。国家予算のほとんどが公務員の給料に使われており、道路などのインフラ整備は日本や台湾などのODAでまかなわれている状態だ。

グアムとパラオはいかにして自立を達成できるのだろうか。豊かな環境と観光業だけでは大国と対等な関係を築くのは難しい。しかし米軍基地の問題一つをとってもそれに対する意見は様々であるし、人口2万人の国ができる産業というのやはり限られてくる。まわりの国々の理解と的確な援助、また援助を受ける側の前向きな姿勢がなければ、こういった島々の自立は難しいのではないだろうかと思う。



秦 照顕

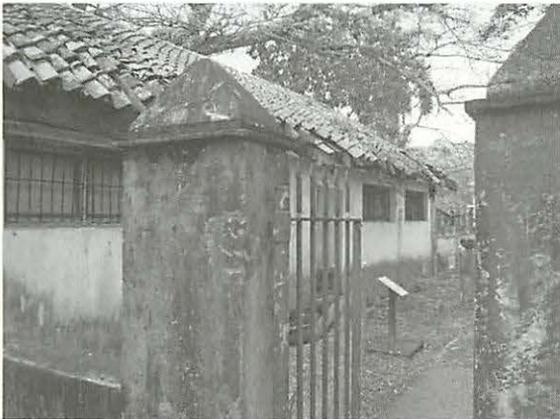
(経済学部 現代経済学科2年次生)

海外体験学習では、普段は経験できない現地の人と人との関係、人と自然との関係、人と社会との関係を見ることができた。またグアム、パラオの経済、諸問題の話を多くの人に聞くことができた。

日本総領事館木村総領事へのインタビューでは、日本とグアムで心のつながりを深くする文化交流、日本人観光客がもっとグアムの文化に興味をもって観光してもらいたいことを言っていた。

グアム大学リサ助教授へのインタビューでは、グアムの中で先住民族のチャモロ人が少数化、伝統、文化、言語の消失を恐れていた。日本人については過去の戦争がタブーとなっているが、沖縄での経験から文化的、精神的なものに触れ、土地に対する思い、文化を共有することで関係が深くなることを言っていた。

グアムでのインタビューから、文化施設への観光は心のつながりを築き、文化の観光、チャモロ人の文化の維持につながるかもしれないと思った。



水野 琢磨
(経済学部 1年次生)

今回の海外体験学習プログラムで、どうすれば島嶼社会が経済的自立ができ、かつ環境を保護していけるのかを考えながらインタビューした。

グアムの場合、大規模で商業的な開発を行っていた。さらに経済成長するために現地では米軍基地受け入れ賛成の人が若干多いようだ。商工会議所の話では基地移設による経済効果は10年くらいだと言っていたが、これに関してグアム大学の人はインフラ整備によっていろんなものの需要が伸びて経済効果はあるが現地の人はその恩恵をほとんど受けないだろうと言っていた。

パラオの場合はグアムほど開発がされていなくて現地の文化が色濃く残っていたし、人の手がつけられていない自然環境がまだたくさん残っているように感じた。パラオの財政のうちアメリカが5割負担している。公共事業は日本・台湾の資本援助に頼っている。主要な産業を育てることが難しいことを考えるとやはり環境立国を目指すしかないのではないかと私は考える。

今回グアムとパラオを訪問して感じたことはグアムのやり方が正解ではないと思ったしパラオのやり方が正解でもないと思った。先進国の考え方を押しつけることはできないので環境立国としてどのような方向を目指してやっていくかを最終的に選択するのは現地に住んでいる人である。



引率教員講評

松島 泰勝 (経済学部 教授)

本海外体験学習プログラムの目的は、グアム、パラオにおける自立と共生を学ぶというものである。米国属領であり、米軍基地拡張計画のあるグアムと、2万人の独立国で、経済自立と自然との共生を目指すパラオにおける自立と共生を、島の方々にインタビューし、各地を見学し、自ら体験することによって明らかにする学習であった。

まず、グアム全体の概要を知るためにグアム総領事館の木村総領事と意見交換した。次にグアムの基地拡張について、賛成派の商工会議所の会頭・事務局長から意見を聞いた。他方、基地拡張に反対の立場のグアム大学のシュスター教授、ナティビダド講師そしてゼミ生から意見を聞いた。そして地元NGOメンバーの案内で太平洋戦争の強制収容所跡・慰霊碑、基地拡張現場等を見学した。

ボランティア活動としては地元老人ホームのご老人との折り紙、合唱等の「心の交流」、そして地元ビーチでのゴミ拾い活動を行った。ゴミ拾い活動に対してグアム知事・副知事書名の感謝状を頂戴した。日本からの団体でこのような感謝状をもらったのは初めてであるとのことであった。

パラオではまず、環境に配慮したリゾートであるパラオパシフィック・リゾートを同職員の

案内で視察した。パラオと日本との関係について日本大使館の定岡大使、パラオへのODAについてJICAの武市調整員と意見交換した。パラオの自然との共生、自立について日本大使館の辻専門調査員、パラオに対する国連活動についてサクマ・パラオ事務所所長、パラオと日本との関係についてパラオ国務省のヒガ儀典官長、そしてパラオと日本との関係や、独立後の歩みなどについてナカムラ元大統領から見解を伺った。

ボランティア活動としては、日本人補習校の生徒との合唱、シャボン玉等の遊び等、パラオ短大学生との合唱、一対一の会話、日本の遊び等、そしてパラオ老人センターにおいて合唱、折り紙・コマ・お手玉等の交流を行った。パラオ海洋試験センター、パラオ国際サンゴ礁センター、コロール州リサイクルセンター・ゴミ処分場訪問、パラオ博物館、首都政府庁舎、テレビ局等を視察してパラオの自立と共生の具体的な取り組みを学んだ。そしてエコツアーに参加し、美しい自然との共生を目指したエコツーリズムを直に体験した。



グアム、パラオという政治体制、社会背景、自然環境のあり方等が異なる島嶼社会における自立と共生を具体的に学ぶことができたと考えられる。またいくつかのボランティア活動を行うことにより当該社会の内部をより深く知り、住民との関係も強くなり、顔の見える人間関係をつくるのが可能になったと考える。

課題としては、パラオでの日程変更によりバスのチャーター代が追加的に発生したことを挙げることができる。次回からは本プログラムの

趣旨に理解を示す現地旅行代理店との連携が望まれる。



学生たちは事前学習会、そして各自の勉強をもとにして、質問や意見交換を熱心に行った。また折り紙、独楽、お菓子、シャボン玉セット、お手玉、風呂敷等、学生各自が工夫して交流のための準備をしてきた。また、タイトなスケジュールにも関わらず、夜遅くまで折り紙や合唱の練習をして交流に臨んでいた。学生たちは非常に熱心であり、問題意識に溢れ、各自の役割を自覚し、積極的に発言、意見を発言し、誠実に交流やボランティア活動を行った。

そのこともあり、パラオでは地元テレビのニュースに出演し、日本人補習校の新聞「パラオ新聞」にも寄稿を求められた。学生たちの非常に真摯な態度に小生は非常に感動した。グアム、パラオで学んだことを踏まえて、今後、自分なりに課題と方向性を見つけ、これからも充実した大学生を送り、グアム・パラオとの関係を深め、国内外のボランティア活動に参加することを期待したい。



○海外体験学習プログラム／インドネシア共和国（パダン、タランバブンゴ）

■参加学生
編澤 良典（経済学部 国際経済学科3年次生）
■企画運営団体、テーマ
財団法人 PHD協会 「地元学をやってみよう！」

■行程			
日程	場所	時間	活動内容
3月19日（土）	関西国際空港	08:45	集合、搭乗手続き
		11:00	空路、デンパサールへ
	デンパサール	17:10	到着
	ジャカルタ	19:15	空路、ジャカルタへ
		20:00	到着後、ホテルチェックイン
3月20日（日）	ジャカルタ	06:15	空路、パダンへ
	パダン	08:00	到着後、タランバブンゴへ移動
3月21日（月）	タランバブンゴ		研修生活動見学、寄合参加、散策、地元学レクチャー
3月22日（火）	タランバブンゴ		村の人たちとの会合、あるもの探し、村歩き
3月23日（水）	タランバブンゴ		参加型による絵地図づくり、外部者による発表
3月24日（木）	タランバブンゴ		地域資源カードづくり
3月25日（金）	タランバブンゴ		村の人たちによる発表、パダンへ移動
3月26日（土）	パダン	13:20	空路、ジャカルタへ
	ジャカルタ	15:00	到着
	デンパサール	17:20	空路、デンパサールへ
		20:05	到着
3月27日（日）	デンパサール	01:00	空路、関西国際空港へ
	関西国際空港	08:30	到着後、解散

編澤 良典

（経済学部 国際経済学科3年次生）

私は今まで、発展途上国の人たちは、現状に不満を持ちつつ暮らしていると思っていた。よりよい利便性を望み、物資や経済的な豊かさを追い求めつつ今を耐えている。そんなイメージ



を持っていたのだ。しかし、我々は無意識のうちに発展途上国＝貧困と捉えていないだろうか？これらの言葉は、我々が自分の、日本のスタンダードが最低限であると勝手に位置づけし、それに満たないもの全てに張ったレッテルにすぎないのではないか？村の人たちはいつも笑顔で、農業や洋裁など、それぞれの仕事に従事しながら我々と変わらず生活している。時間に追われることなく、仕事中でも、知り合いが通るとガラガラと楽しそうに立ち話をする。村には精神的な豊かさが溢れていた。日本は物質的に豊かな国である。天秤にかけてどちらが良いかの優劣をつけることはできない。どちらもどっちで素晴らしいということに気づくことが大事だと思う。

私は今回の旅の経験を多くの人に話したいと思う。聞いた人が各々自分で考える材料に少し

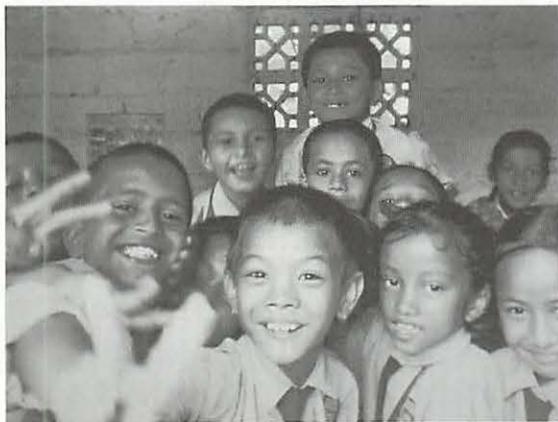
でもなればいい。ただ、間違っただけのイメージだけでは与えないように私自身も言葉を選ぶ努力をしなければならぬ。この程度しか今の私にはできないし、この程度でもいいのかなとも思うのだ。私はインドネシアの小さなナガリでゆった

りと流れる時間の中で生活し、日本の喧噪のなかで感じがちな義務感や圧迫感を忘れることや、自分のペースで物事を進めることも時には大事だと学んだのだから。

企画名	タイトル	2010年度（ボランティア等）体験プログラム報告会
報告者名		竹村 光世（深草キャンパス コーディネーター）
日時		夏 季：2010年10月13日（火）17時00分～20時00分 春 季（予定）：2011年4月27日（水）17時30分～19時00分
場所		深草キャンパス 21号館401号室
実施主体		ボランティア・NPO活動センター
参加人数		夏季：46人（報告者含む）

■経緯・目的

センターで実施している体験学習プログラムに参加した学生が、現地でのどのようなことを学び、考え、今後のボランティア活動や大学生活等にどのように活かしていくのかを発表する機会として、プログラムの一環で報告会を行っています。従来は参加学生と教職員だけで実施していましたが、今年度はより多くの学生に本プログラムに関心をもってもらうため、国際分野の活動やスタディツアーに関心のある学生をはじめとして、誰でも報告を聴ける形で行いました。



■概 要

参加した学生が、プログラムごとに、プログラムでの体験を通じて学んだことをそれぞれのスタイルで報告しました。体験プログラムに参加した学生以外に、プログラムに関心を持つ学生や、受け入れ先（スタディツアー企画団体）

のNPO団体の方にも参加いただきました。発表概要は下記の通りです。

	訪問地・発表者人数	テーマ
夏 季	滋賀県 プログラム参加者7名	「森にふれあい森に学ぶ」
	タンザニア連合共和国 プログラム参加者13名	「貧困から脱出する道をさぐる」
	スリランカ民主社会主義共和国 プログラム参加者8名	「自分の目で、心で感じるフィールド調査」を学び、「豊かさとは何か」を考える
	ネパール連邦民主共和国 プログラム参加者1名	「日本で学んだ研修生の村の生活を体験！」
春 季 (予 定)	アメリカ合衆国（グアム島）、パラオ共和国 プログラム参加者9名	「島嶼社会における自立と共生を考える」
	インドネシア共和国 プログラム参加者1名	「地元学をやってみよう！」

■参加者の声・得られた効果など

夏季報告会のアンケートでは、発表側から「他のプログラムの様子を知ることができてよかった」「他の方の発表から、内容、プレゼンの仕方など学ぶことがたくさんあって参考になりました」という感想がありました。

また、他の参加者からは「実際に訪れて肌で感じたことと写真を加えることで、臨場感が溢れていて良かった」「参加してみたいと思えた」「各プログラムごとに内容が異なっており、興味深かった」「各プログラムともツアーのこと

だけでなく事後に学習したであろう努力とメンバーの団結力が伺えるものでした」などの声が寄せられました。



■コーディネーター所感

参加したプログラムごとの発表にしたため、発表に向けての準備を進めるなかで、他の人の

考えに触れることや、自分の学び、感じたことを人にわかりやすく説明することで、自分の気づきをより深めることができたようです。

また、海外に行ってみたいと漠然と考えていた学生にとっても、実際に最近行った人の生の声を聞くことでイメージを少しでも具体化できたことと思います。

卒論等、今後に活かしていきたいとの報告もあり、海外に行って終わりではなく、これから次の活動を続けていくことが大事とのメッセージを発信することはできたと思いますが、実際にどのように続けているのか報告を聞くことは少なく、今後のセンターの関わり方をもう少し提案するようなことも必要かもしれません。

このことを春季プログラム報告会の課題として、考えていきたいと思います。